

氏名	しも がき ひと し 下 垣 仁 志
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 353 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学位論文題目	倭王権構造の考古学的研究

論文調査委員 (主査) 教授 上原真人 教授 泉 拓良 助教授 吉井秀夫

論 文 内 容 の 要 旨

畿内古墳の圧倒的な巨大性と、突発的なその出現とを主な根拠として、これまで定説化していた専制的大王を頂点とする世襲的諸首長による階層構造という古墳時代像は、近年、各地における古墳の緩やかな醸成過程や地域性が確認されるに従い是正され、各々の利害にもとづき結集する諸首長からなる連合構造という「新たな」古墳時代像が提起されている。こうした動向には基本的に賛同するが、疑問もある。地域性や独自性は確かにある。また、畿内の生産的・物理的優位性は圧倒的でもない。しかし、畿内中枢を核とする中心性・定型性や格差が、厳然と存在するのも事実である。追究すべきは、一見相容れないこれらの性質を包括する説明体系である。

本論文は、有力集団内関係(レベルⅠ)、有力集団間関係(レベルⅡ)、東アジア内関係(レベルⅢ)の3つの分析レベルを設定し、A. 畿内中枢から拡散する副葬器物の流通様態、B. 古墳祭式の生成構造、C. 古墳群構造、D. 複数埋葬という4つの分析視角から、その説明体系を模索したものである。

有力集団間関係(レベルⅡ)に関しては、銅鏡をおもな分析対象として、畿内中枢による格付けと、中心一周辺構造が意図的に創出されたことを読みとった。かつては、銅鏡分布の変遷を、大和政権の勢力圏拡大と結びつける見解が支配的だった。しかし、近年の詳細な編年研究に立脚する限り、三角縁神獣鏡は最初期から広域に分布し、各種器物は分布状況が著しく変動する。倭国で製作された倭製鏡を分類・編年し、古墳時代前期における分布を検討すると、畿内中枢を核とした傾斜減衰分布を示し、その傾向は鏡径に比例する。すなわち、大型の鏡ほど畿内中枢に密集するのである。また、拡散の時期差と捉えられがちだった腕輪形石製品3種(鋏形石・車輪石・石釧)も、共伴状況から種別を素直に格差とみなせば、倭製鏡と同じ分布状況を示す。さらに、一古墳の保有数を基準にすると、三角縁神獣鏡の分布も、畿内中枢を核とする傾斜減衰分布を示す。すなわち、畿内中枢から拡散したと判断できる器物は、各時期のものが諸古墳で良好な共伴状況を呈することから、畿内中枢を核とし、諸地域を分節的に格付ける目的で、継起的に分配されたものと見て、まず間違いない。このような格付けは、サイズ(倭製鏡の場合)、種別(石製品の場合)、数量(三角縁神獣鏡の場合)のように、多様な基準でなされたと判断できる。

上述したような諸地域の分節化は、各種器物の分布状況から、その時その時の王権の戦略に依っていると推定できる。たとえば、古墳時代前期中葉に各種器物の分布域が縮小するのは、中国王朝との結びつきの弱化和相関し、前期後葉を境に西方諸地域の分布が増大するのは、半島諸地域との関係強化を反映し、中期末葉以降に東方諸地域における分布の比重が増すのは、畿内中枢による東方経営の開始と深く関わる可能性が高い。このように、畿内中枢から拡散した諸器物には、すぐれて戦略的意図が付帯していたと考えられる。近年、古墳祭式や副葬器物の起源を諸地域に求め、諸地域の役割や実力を過大に評価する研究が増えている。しかし、古墳祭式の生成過程を検討すると、諸地域がはぐくんだ墳墓祭式や器物を、畿内中枢が吸収・統合し、格差を設けて諸地域に再分配していたことがわかる。つまり、政治的上位から下位への働きかけが、格差のついた祭式・器物の分配であり、下位から上位への働きかけが、祭式・器物の委譲と言える。この吸収―再分配は継起

的で、諸器物とともに各種祭式も諸地域に拡散した可能性が高い。

有力集団内関係（レベルⅠ）に関しては、近年、埋葬人骨の歯冠計測による親族構造の分析や、副葬品目と性差との対応性に関する知見が飛躍的に進展した。その成果によれば、5世紀後半以前には父系世襲制は発生しておらず、女性支配者の存在や男女連立的統治体制が想定でき、5世紀後半に、男性が圧倒的優位に立つ画期があるという。本論文では、こうした成果を踏まえ、一古墳における埋葬形態が支配のあり方を反映するという前提で、前方後円（方）墳における複数埋葬を検討した。具体的には、埋葬人骨と副葬品目から性別を推測できる複数の被葬者が、一古墳の埋葬諸施設において、どのような位置関係および主—副関係を有するか、通時的に分析したのである。その結果、古墳時代前期においては、相対的に「女」性的埋葬施設が卓越し、「男」性的埋葬施設と補完関係にあるが、中期になると後者が優位になり、中期末葉には後者が前者を圧倒する。これはもともと「女」性的であった前方部頂平坦面の中心埋葬施設が、中期末葉頃に「男」性一色に染まることと一致する。こうした現象は、同時期に広域で認められ、複数埋葬の各埋葬施設や副葬品においても、畿内中枢が設定した格付けの原理が踏襲されている事実は、畿内中枢を核とする広域的な規範が、諸地域においても積極的に反復された結果であると解釈できる。

東アジア内関係（レベルⅢ）に関しては、弥生時代末期における公孫氏との関係が奈良盆地東南部の中枢成立と、古墳時代前期前半における魏による冊封が広域的な倭王権成立と、前期後葉以降における中国南朝や韓半島との通交が西方諸地域重視の方策と、中期末葉以降における中国南朝や韓半島との関係弱体化が東方経営の本格化と、それぞれ強く関連していることが、畿内中枢から拡散した器物の分布状況からうかがえる。ただし、畿内中枢は、単に器物のみを導入したわけではなく、支配方式のアイデアも中国王朝から得た蓋然性が高い。たとえば、古墳時代中期には、府官制という軍事的統治体制と冊封関係をモデルとした奉仕関係が導入されたとする有力な説がある。のみならず、それ以前の弥生時代末期～古墳時代前期における継起的な祭式・器物の吸収—再分配や、分節的な格付け方式にも、証拠不十分ながらも、中国礼制の元会儀式や冊封の思想を看取できる。すなわち、弥生時代末期に成立した倭王権は、中国王朝の儀礼的方式を積極的に導入し、同型的に反復していた可能性が指摘できる。こうした外部方式の意図的模倣が、倭王権の展開にとって重要な外的契機となったと考えられる。

以上、要約すると、生産関係や階級関係の矛盾がとくに進展していたわけでもない畿内地域が、広域に及ぶ中心—周辺構造の中枢であり続けた要因は、長距離交易の重要な結節点であったことだけでなく、中国王朝と関係するなかで、採用・模倣した中心—周辺構造の再生産方式、すなわち格付けをとともなう祭式・器物の吸収—再分配方式などを、積極的に推進したことにある。この格付け方式は、諸地域の有力集団内においても、各地域の序列化を目的として、同型的に反復されており、それが各地に対する浸透の度合をさらに強めたと考えられる。中国王朝を中核とする自立的政体の同心円の構造において、政治的上位が下位に器物などを分配し、下位が上位を積極的に模倣することが、倭王権の基盤となっていたのである。そうした機制が、のちの律令国家につながる畿内中枢の実際的な優位性を促進したのである。また、こうした構造が存在したがゆえに、東アジアレベルの変動が、王権中枢のみならず、諸地域の統治方式にまで、影響を与えることになったのである。

以上が本論文の概要である。以下、本論文の構成と、各章の概要を記す。

まず、第Ⅰ部において、有力集団間関係（レベルⅡ）を検討した。第1章では、有力集団間関係に関わる考古学的諸研究の流れを整理することで、問題点を抽出するとともに、それを克服するための論点を提示した。問題点は、畿内中枢と諸地域との関係について、後者に対する前者の専制支配を説く説と、後者の自主独立すなわち地域国家論を主張する説を両極とする諸々の議論を、妥当性の高い議論へと、いかにして実証的に収斂するかにある。これをクリアするには、脈動する社会関係の動態と、その変容過程を考察する必要がある。そのために、時間的には小期ごとに分析する視点が、空間的には複数の位相で有力集団間関係を解析する視点が不可欠と考えた。さらに、その視点を十全に生かすために、古墳の根幹要素である器物と祭式の流れを追跡することが不可欠であることを示した。

有力集団間関係の共時的・通時的構造を明らかにするためには、時間軸の精確さを保証する編年が必要である。第2章では、時間軸の基準となる倭製鏡の編年を行なった。存続期間の長さ、数量および分析属性の豊富さ、墳墓における自身および他器物との一括資料の潤沢さにおいて、倭製鏡は古墳副葬品のなかでも抜きん出ている。この利点を生かし、倭製鏡を基

準にすえて、他器物との併行関係をも加味することで、細密な議論を保証できる編年網を打ちたてた。

第3章では、研究の蓄積が浅い倭製鏡生産の実態について、連作鏡の視座から追究した。分析の結果、第2章の編年成果とからめ、連作鏡が短期間に継起的に製作されたという実態が明らかになった。この帰結は、当該期の器物生産の一面を明らかにしただけでなく、王権中枢における器物生産が、高い政治性を有していたことを、具体的な証拠をもって示したことになる。

第4章では、第2・3章で示した編年・生産体制像に立脚して、倭製鏡の流通様態を、共時的・通時的に検討し、この器物の流通により結ばれていた有力集団間の関係を分析した。その結果、王権中枢が、諸地域を分節的に序列化するために、倭製鏡を継起的に製作・分配していたこと、そして、その序列化は、畿内地域を一貫して高く格付ける一方で、各時期の大局的社会状況に応じて変動していたことが明らかになった。畿内中枢を核とする有力集団間関係の長期的な展開を、具体的な器物を材料に解き明かすことができたのである。さらに、諸古墳における副葬状況の分析を通じて、分配者の論理だけでなく、受領者側の論理、すなわち序列化された有力集団が、それぞれの格付けに応じて、器物をいかに利用したのかを追究した。

第5章は、2つの軸から議論を展開した。倭製鏡とそれ以外の器物の流通様態を明らかにすることが軸の一つであり、畿内中枢を核とする有力集団間関係を律していたメカニズムを、古墳祭式の吸収と再分配の視点から読み解く試みが、もう一つの軸となる。この結果、第4章で明らかにした格付けの方式と、第6章で示す地域間関係とが組み合わさって、畿内中枢を頂点とする中心—周辺構造の維持・再生産システムが、吸収と再分配を基軸とする古墳祭式の生成構造と密接に関連している事実が明確になった。

第6章では、古墳時代前期における畿内諸地域の大型古墳群を分析の俎上へのせ、畿内中枢の超大型古墳群やその周辺諸地域の大型古墳群を比較し、古墳群のランクを設定し、超大型古墳群を頂点とする古墳群の格差を検討した。地域間交流や古墳群内構造についても多角的に分析を加えることで、重層的な有力集団間関係の実態を抉りだした。なお、本章の基軸となった大阪府の大型古墳群である玉手山古墳群の調査には、論者が2001年から参加しており、本章はもっともフィールドに根ざした章となった。

第I部の付章では、河内王朝（政権）論の学史的検討をおこなった。河内王朝（政権）論は、古墳時代前期から中期における畿内地域の有力集団間関係を考究する上で、避けて通ることができない重要な学説である。近年の古墳群の分析を中心とした有力集団に関する議論における混乱を整理し、問うべき論点を明確化するために掲載した。河内王朝（政権）論の考古学的証拠とされてきた玉手山古墳群の調査研究史と関連づけることで、文献史学との論点の接続をはかる試みである。

第II部においては、有力集団内関係（レベルI）を検討した。分析材料としたのは、1つの古墳内の複数埋葬の様態である。複数埋葬という有力集団内関係の最小単位を抽出・分析することで、当該期の有力集団構造のミニマムな基本形と、その変容過程を明らかにできると考えたのである。

第7章では、有力集団内関係に関する学説史を簡単に整理し、現状の到達点を示すとともに、追究すべき論点を提示した。そして、複数埋葬を、広域的かつ長期的に透徹した視座から分析することが、有力集団内関係を考古学的に解明する有効な一手段であることを導出した。

まず、第8章では、前方後円（方）墳における前方部埋葬を分析した。埋葬の主体となる後円（方）部中心の埋葬に対して、副次的な前方部埋葬施設の設置位置や、性差を反映する副葬品目の傾向を抽出し、その変容過程を追跡したのである。その結果、古墳時代中期前半までは、前方部墳頂平坦面の中心埋葬には「男」性色の稀薄な者を葬る傾向があることが判明した。ただし、これは当該期の支配構造として有力仮説となっているヒメーヒコ制に直接由来するわけではなく、前方後円（方）墳の複数埋葬から読み取れる有力集団構造は、男女を問わず1人の卓越者を中心に、各々の集団構成に応じて兄弟姉妹が分掌していたものと推量できる。しかし、古墳時代中期中葉以降、前方部墳頂平坦面の中心埋葬に「男」性的・武威的側面が強くなる。これは、古墳時代中期末葉以降、女性首長が消滅し父系的・直系的継承に変化したとする人骨分析成果によく対応する。

第9章では、前章の前方部埋葬に関する分析成果を踏まえ、複数埋葬のその変容過程を、広域的かつ長期的に展望した。データが膨大なため、分析対象を前方後円（方）墳の複数埋葬に絞った。従来の議論に欠落しがちな長期的視座から複数埋

葬を通覧できたことが、本章の成果である。

第10章では、前2章で得られた有力集団内関係(レベルⅠ)と、第Ⅰ部で抽出した列島レベルの有力集団間関係(レベルⅡ)との、同型性および連動性について簡単に論じた。それとともに、列島レベルの有力集団間関係は、さらに上位のレベルである東アジア内関係(レベルⅢ)と連動していることを示唆した。そして、こうした諸レベルにおける同型性・連動性は、諸レベルに通底する序列化への志向によって律せられていたことを主張した。

論文審査の結果の要旨

列島の古墳時代像に関しては、後の大和国や河内国に分布する前方後円墳の規模が、他地域を圧倒し、しかも突如として巨大古墳が出現するという認識から、大和政権が世襲的大王として専制的に君臨し、各地の首長を冊封するという体制をイメージすることが多かった。漢鏡が弥生時代から100年以上にわたり伝世され、古墳時代になって首長の権威の革新にともない副葬されたとする伝世鏡論や、後の畿内を中心として見事な分布網を描く三角縁神獣鏡による同範鏡理論は、これを裏付ける具体的な証拠であった。しかし、近年、大規模開発などに伴う発掘調査が進展すると、弥生時代には、個性豊かな墓制やそれに伴う祭式が列島各地で展開しており、古墳は決して畿内で突如発生したものではなく、各地の墳墓祭式の上に成立したものであることが明らかになった。それを踏まえ、専制的大和政権像は、連合政権の中核となる倭王権像に座を譲り、時には、畿内の優位性・中心性を否定した「新たな古墳時代像」も提起されるようになった。

しかし、前方後円墳の形態や規模だけでなく、三角縁神獣鏡をはじめとする古墳に副葬された器物の分布が、畿内を中心としている事実は否定できない。そこで論者が問題としたのは、個性的豊かな墳墓祭式が弥生—古墳時代の列島各地に存在したという事実、これに対し古墳の存在形態は明らかに畿内を中心とするという厳然たる事実を、いかに整合的な歴史像として説明するかということであった。本論文では、この主題に答えるために、有力集団内関係(レベルⅠ)、有力集団間関係(レベルⅡ)、東アジア内関係(レベルⅢ)という3つの分析レベルを設定し、A. 畿内中核から拡散する副葬器物の流通様態、B. 古墳祭式の生成構造、C. 古墳群構造、D. 複数埋葬という4つの分析視角から、その説明体系を模索している。論者が提示した説明体系自体には異論の余地もあり、今後、賛否両論が巻き起こっても、必ずしも決着するとは思えない点がある。しかし、その説明体系を提示する過程で、論者が行なった独自の資料整理や分析の中には、現在の古墳時代研究において傑出した成果が少なくない。

まず、有力集団間関係を主題とした第Ⅰ部において、畿内の中心性を、きわめて明快な考古学的分析によって再確認している。そのために、論者が独自に分析を深めたのが、漢式鏡の諸要素を列島で独自にアレンジした倭製鏡(倭製鏡、倭鏡)である。あまりにも多様で、これまで分析対象として敬遠されがちであった倭製鏡の文様要素を抽出、系列化し、各系列の併行関係を検証し、古墳時代前期における倭製鏡の編年体系を確立したことは、それだけでも大きな成果である。さらに、その分布状況から、古墳時代前期において、倭製鏡が畿内中核を核とした傾斜減衰分布を示す事実、とくに面径が大きい倭製鏡ほど畿内に密集し、畿内中核を核として、倭製鏡の面径によって、列島各地が分節的に格付けられている事実を指摘した功績は大きい。

さらに、倭製鏡の分析成果を踏まえて、これまで研究が積み重ねられてきた三角縁神獣鏡をはじめとする中国鏡や腕輪形石製品、合子形石製品、筒形銅器、巴形銅器、甲冑などの古墳時代前期—中期の器物に関して、同様の手法で、畿内中核を核とした見事な傾斜減衰分布図を描いた鮮やかな手並みには目を見張るものがある。その過程で、倭製鏡における面径差に対して、三角縁神獣鏡における保有枚数差、腕輪形石製品における鋳形石・車輪石・石釧という品種差など、格付け基準が器物によって異なる事実を鮮明化させた点も特筆すべきであろう。

また、有力集団内関係を主題とした第Ⅱ部において、論者は被葬者集団の最小単位となる一古墳における複数埋葬に着目し、前方後円(方)墳において副次的な前方部埋葬施設の設置位置や、性差を反映する副葬品目の傾向を検討した。古墳時代中期前半までは、前方部墳頂平坦面の中心埋葬には「男」性色の稀薄な者を葬る傾向があり、中期中葉以降、前方部墳頂平坦面の中心埋葬に「男」性的・武威的側面が強くなる。これは、古墳時代中期末葉以降、女性首長が消滅し父系的世襲制が成立したとする人骨分析成果を、考古学的分析で検証したことになる。

このように論者が設定したレベルⅠ・Ⅱにおいては、独自の資料と方法を駆使して、著しい成果をあげているが、東アジ

ア内関係（レベルⅢ）については、多くの課題を残している。弥生時代末期における公孫氏との関係が、奈良盆地東南部における畿内中枢の成立と、古墳時代前期前半における魏による冊封が、広域的な倭王権成立と、前期後葉以降における中国南朝や韓半島との通交が、列島の西方諸地域の重視策と、中期末葉以降における中国南朝や韓半島との関係弱화가、列島における東方経営の本格化と、それぞれ強く関連していると論者は推定する。また、畿内中枢による支配方式のアイデアは、中国王朝から得たものと考え、第Ⅰ部で明らかにした列島各地の分節的格付けは、各時期の王権の戦略に応じていると、論者は判断する。しかし、これらの議論は見通しを示したにとどまり、具体的な資料とその検討を十分にとまなっていない。古墳祭式の生成過程を、諸地域がはぐくんだ墳墓祭式や器物を、畿内中枢が吸収・統合し、格差を設けて諸地域に再分配したとする、論者を含めた近年の研究動向がもたらした有力な仮説も含めて、今後の研究の深化を期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年2月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。